



# 博士教育を考える

理科系はもとより、文科系の学問分野でも、新しく研究者や大学の教員となる人の多くが、大学院博士課程を卒業し博士号を取得した課程博士で占められるようになってきた。大学院博士課程は、日本の学術を担う人材の養成機関である。しかし、その重要性のわりに、その実態については、あまり一般には知られていないようだ。日本全体でいったい何人の大学院生がいるのか、実際にはどのような教育がなされているのか、どのような生活をしているのか、一般の印象はひどくあいまいなものだろう。従来の大学では学部教育が主要な任務で、大学院は「おまけ」として付けられていた。1980年代になると、経済の中心が知識産業に転換し、高度専門教育の大幅な充実化が必要となり、大学院の拡充がはかられるようになった。日本で最初にできた博士課程のみの大学院大学、総合研究大学院大学（総研大）も、そのような情勢のなかで設立されたものである。1990年代には大学教育の中心を学部から大学院に移行する「大学院重点化」が政府の政策として強力に進められた。2000年代には、国策である「科学技術創造立国」を進める基盤として、大学院教育のさらなる強化が進められようとしている。このような急激な改革により、博士教育は大きく変わった。実態が理念についていけない面もあり、混乱と試行錯誤の中から、日本の博士教育は大きな転機を迎えようとしている。その現状と課題についての取材レポートである。（編集部）



写真：由利修一